

国内経済情勢

概観

設備投資の増勢はやや鈍っているが、なおかなりの増加基調にあり、個人消費も盛り上がりを示すなど総需要は堅調を続けている。生産活動は根強い上伸基調をたどり、これに伴って労働力需給もひっ迫ぎみに推移している。商品市況面では一部に多少の弱気配もうかがわれるが、総体として地合いは堅く、卸売物価も上昇傾向を続けている。9月期決算企業の経常利益は引き続き相当な増益となり、増配企業数も前期に近い増加を示した。

一方、金融市場では、財政資金の大幅散超が持続したものの、引きゆるみ感は見られず、年末月にはいってコール・レートは上昇し、債券市況も軟調に推移している。銀行の融資態度にはしだいに抑制色が加わりつつあり、これに対応して企業では手元資金の温存をはかり、早めに借入れを進めようとする動きも目だっている。ただ企業の借入態度には総じていまだ差し迫ったものはないが、貸出金利の上昇も比較的小幅にとどまっている。

10月の国際収支は総合で78百万ドルの赤字と再び大幅逆調となり、外貨準備も減少した。貿易収支を季節調整した基礎収支の赤字幅は引き続き多額に上っている。

11月18日、英国はポンド切下げならびに金融、財政上の緊縮措置を決定したが、これに伴い翌日

米国なども公定歩合を引き上げ、わが国経済界に大きな衝撃を与えた。わが国の国際収支がいまださほど改善を示していない段階において、このように国際環境が一段ときびしさを加えるに至ったことは注目される。

生産は根強い上伸基調

鉱工業生産(季節調整済み)は、9月に前月比+3.3%と大幅に増加したあと、10月(速報)も+1.0%と続伸した。この結果、年初来10月までの前年同期比伸び率は+19.8%と高水準に達しているが、先行きについても、11月調査の本行「主要企業短期経済観測」によれば、増勢は多少鈍るにしても引き続きかなりの増加が見込まれている。当月の生産を財別にみると、一般資本財は電気機械の増加から、輸送機械は鋼船の著増によりそれぞれ相当の増加となり、また建設資材の伸びも目だったが、反面、耐久消費財は電気機械の反動減が響いて減少し、生産財も鉄鋼の減少から前月比横ばいにとどまった。

一方、9月に生産と同様大幅の増加を示した鉱工業出荷(季節調整済み)は、10月の速報で前月比-1.3%と減少した。もっとも、これには前2ヵ月急増を続けた鋼船、鉄道車両の著減が大きく響いており、月々のふれをならしてみると、出荷の足どりは引き続きかなりの増加基調にあるものとみられる。財別には、輸送機械が上記の事情から急減したほかは各財とも増加したが、とくに民生用電機を中心に耐久消費財の増加が目だった。

10月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、前月比+2.2%と8月来の増勢を持続し、製品在

庫率(109.5)も出荷の減少からかなり上昇した。

この間、企業の設備投資意欲には依然衰えがみられず、設備投資は根強い拡大を続けているものとみられる。前記「主要企業短期経済観測」の結果によれば、全産業の設備投資(有形固定資産計上ベース)は42年度上期に前期比+20.3%と目だって増加したあと、下期も+8.3%と増勢は鈍化しているものの、なおかなりの増加が見込まれている。先行指標面では、10月の機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は前月急減(-23.7%)の反動もあり、製造業を中心に前月比+44.5%と大幅に増加し、また10月の建設工事受注高(民間産業、季節調整済み)も前月に引き続き高率の伸びを示している。

このような設備投資の根強い動きとともに、個人消費も賃金の上昇や農家所得の増大を背景に、このところかなりの盛り上がりを示している点が注目される。全国百貨店の売上高が、耐久消費財や衣料品を中心に最近目だって好伸していることはその一面を示すものといえよう。

なお、労働力需給は依然ひっ迫ぎみに推移しており、とくに中小企業ではかかる傾向が顕著にうかがわれ、本行の「中小企業短期経済観測」などでも、経営上の隘路として人手不足を訴える企業が著増している。

卸売物価は続騰

最近の商品市況をみると、石油、セメント、基礎薬品類、砂糖等が堅調な動きを続けるなかで、10月中旬から11月はじめにかけて繊維が大勢弱含みとなり、鉄鋼も下押し商状を示すなど軟化を示す商品が若干目だった。しかし、その後、鉄鋼(鋼板類)が生産調整の具体化を背景に強含みとなり、綿糸も小反発したほか、銅も海外相場高から急騰するなど再び強含みを示す商品が増加してい

る。もっとも、一部には先行きに対する漠然とした不安感もうかがわれるが、総体として商品市況は、これまでの強含み基調を変えるには至っていない。

このような情勢を映じ、本行卸売物価は10月に食料、非鉄等の値上がりを主因に前月比+0.8%と相当の上昇を示したあと、11月も非鉄、木材、繊維の上伸が響いて上旬は前旬比+0.2%、中旬も同+0.4%と続騰(工業製品も10月+0.2%のあと、11月上旬+0.1%、中旬+0.2%と続騰)しており、このままの水準で年内横ばうとしても、42年中の卸売物価は前年比+2.7%とかなりの上昇を示すことになる。

一方、消費者物価(東京)は、9月には食料品や衣料品の値上がりから前月比+2.4%とにわかに騰勢を強めたあと、10月も消費者米価の引上げなどが響いて+1.5%と大幅に続騰した。前年同月に比べてもこの2ヵ月は5%高前後と水準をさらに高めている。

銀行の融資態度はしだいに抑制色を加える

10月の銀行券はほぼ前月並みの増発(本年430億円、前年437億円)となったが、食管会計の支払増大が大きく響いて財政資金の月中払超額は3,103億円(前年941億円)の巨額に達した。11月にはいつてからも同様の傾向が続いており、このため市場の余剰資金は両月とも多額に上ったが、これに対し本行は主として短資業者に対する政府短期証券の売却によって調整した。この間、コール市場残高は目だって増加したものの、市況は引きゆるみ感を示すことなく推移し、11月末近くには年末月を控えて小縮まりぎみとなり、月明け後コール・レートは各条件物とも日歩1厘上昇した。なお、銀行券は個人消費の堅調を映じて根強い増勢を続けており、月中平均発行高の前年同月比伸び

率は、10月に+17.0%と相当な上昇を示したあと、11月もさらに一段と水準を高めている。

10月の全国銀行貸出増加額は544億円と前年(119億円の減少)とは様変わり増加した。もっとも、前年が減少を示したのには期末預金に関連した貸出の反動落ちが少なからず響いており、9月、10月をならしてみると本年の貸出増加額は前年同期比+4%の微増にとどまっている。一方、相互銀行、信用金庫など中小企業金融機関の貸出増加額は、9月、10月をならしてみると前年同期比2割程度の増加と、なお比較的高水準を維持している。

銀行の融資態度はしだいに抑制色を加えつつあるが、一方企業の借入需要は、設備支出の増大などに加え、先行きに備えて手元資金を温存し銀行借入れを早めに進めようとする動きもみられるため、このところ増勢を強めている。ただ、総体として企業の借入態度にはさしてひっ迫感が生ずるまでには至っていない。貸出金利は9月以降反騰に転じたが、上記のような情勢を映じその上昇幅は比較的小幅にとどまっている。

英ポンド切下げに伴う一連の報を伝えて株式市場は一時急落を示したほか、このところ下げ一服模様を呈していた公社債市況も金融情勢の先行き見通しもからんで、上場相場、店頭気配とも再び軟化した。ただ、国債の相場は弱含みながらも保合いを続けている。なお、このような既発債市況の軟調などを背景に、新発債の消化は各債券とも軒並みにその足どりがいっそう鈍っている。

総合収支は再び大幅の逆調

10月の国際収支は、貿易収支の黒字幅が比較的小幅にとどまったうえ、長期資本収支の赤字がかさんだため、総合収支では78百万ドルの赤字と再

び大幅の逆調となり、外貨準備も減少した。

季節調整後の貿易収支の動きをみると、輸入が高水準ながら前月比微減となった反面、輸出も伸び悩んだため黒字幅は前月とほぼ変わらず、7月以降みられた黒字幅の拡大傾向は当月一服模様となり、基礎収支じり(貿易収支のみを季節調整)では大幅な赤字を続けている。

10月の輸出は、前年同月比+7%とここ一両月の伸びに比べ増勢一服ぎみとなり、季節調整後の実勢でも前月より若干減少した。品目別(通関ベース)には、船舶が著増したにもかかわらず、食料、繊維、化学品等が不振を続けているほか、これまで好伸を示してきた機械類(光学機械、テレビ、ラジオ)の増勢が鈍り、鉄鋼も前年水準を下回った点が目だっている。地域別には東南アジア向けが停滞し、米国向けの伸びもやや足踏みとなるなど主力市場はともにはかばかしい回復を示していない。もっとも、10月の輸出信用状は前年同月比で+9%と好伸し、季節調整後でもかなり水準を高めている。

一方、10月の輸入は季節調整後では前月をやや下回り、ひとところに比べ増勢は鈍りぎみとなっているが、その水準は相変わらず高く、前年同月比+22%となお7~9月平均に近い伸び率を示している。品目別(通関ベース)には、繊維原料等は引き続き落ち着いている反面、木材、石炭、鉄鉄等は相当の増勢を続けるなど、これまでの動きに格別の変化はみられない。先行指標である輸入承認の動きをみると、くず鉄や鉄鉄の落ち着きから10月も前月に続いて伸び率は鈍化したが、11月には再び増勢が強まっている。

(昭和42年12月1日)